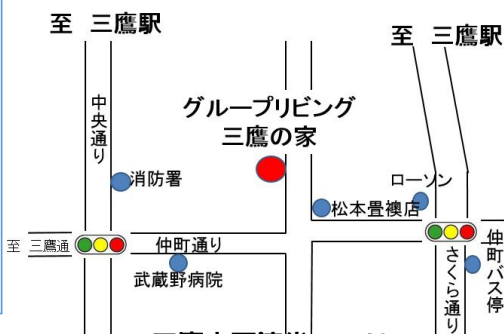


佐々井秀嶺上人特別講演会

日本人でありながら、インドに帰化し、カースト制度に苦しむ下層の人々の支援活動に生涯を捧げ、その活動はマザー・テレサに匹敵すると言われています。

- テーマ 「インドに残るカースト制度と仏教改宗運動」
- 日時 7月2日(土) 午後2時～4時
- 場所 三鷹市民協働センター第一会議室
- 参加費 1,000円
- 連絡先・申し込み なりきよ
電話 080-1362-5359

みたか・みんなの広場は、みなさんのために開放されています。雑談に、お茶にご利用ください。



三鷹市下連雀4-5-19
グループリビングみたかの家内

みたか・みんなの広場 催しのご案内

開催日時	テーマ	参加費用	主催・問い合わせ
6月27日 (月) 13:30~15:00	リレートーク 是枝 嗣人さん(一般社団法人 The Egg Tree House) 「悲しみに寄り添うグリーフサポート」(200円)		みたか・みんなの広場 なりきよ ☎080-1362-5359
7月2日 (土) 15:00~16:00	鉄ちゃん、集合！ 私は乗り鉄、あなたは、撮り鉄？ (毎月第1土曜日)	中学生以下100円、大人300円	みたか・みんなの広場 鈴木 ☎080-1022-2281
7月6日 (水) 14:00~15:30	みたかオレンジカフェ 認知症、高齢者介護なんでも相談 (毎月第1水曜日)	無料	みたか・認知症家族支援の会 石村 ☎080-6627-3551
7月9日 (土) 13:30~15:00	般若心経カフェ(毎月第2土曜日) 初期仏教の経典を読む(500円)		みたか・みんなの広場 なりきよ ☎080-1362-5359
7月15日 (金) 19:00~21:00	親の介護を考える相談会 介護でお悩みの方・予約優先	500円	NPO法人グレースケア 山田 ☎0422-70-2805
7月16日 (土) 13:30~15:00	タロットカードセラピー (毎月第3土曜日、前日までに予約を)	占い3,000円/30分 指導500円	日本タロット占術協会 副会長 ミスティ・ローザ ☎080-1362-5359(なりきよ)
7月21日 (木) 13:30~15:00	茶話会「これからのいろいろを話しましょう」 (毎月第3木曜日)	500円	HumannLoop'人の輪' 竹内 ☎090-7632-7251
7月22日 (金) 13:30~15:00	シニアの働き方を考える	無料	わくわくサポート三鷹 霧島 ☎0422-45-8645
7月25日 (月) 13:30~15:00	リレートーク 整体・整膚・リンパ療法師 長坂 伸江さん 「愛のひっぱり健康法「整膚」で健康づくり」(200円)		みたか・みんなの広場 なりきよ ☎080-1362-5359
7月26日 (火) 14:30~16:00	親子で楽しむ科学あそび スライムとアイロンビーズあそびー (1家族300円、3家族8人まで、要・電話申し込み)		三鷹科学遊びの会 石村 ☎080-6627-3551
7月28日 (木) 19:00~21:00	タときオレンジカフェ・みたか 認知症、高齢者介護なんでも相談 (毎月第4火曜日)	無料	みたか・認知症家族支援の会 石村 ☎080-6627-3551
毎週火曜日	マッサージ教室 (外反母趾対策)	主催者までお問い合わせ ください。	篠山(しのやま) 090-8558-1014

NPO法人Humannloop'人の輪'
http://humannloop.web.fc2.com/

NPO法人グレースケア機構
http://g-care.org/

みたか・認知症家族支援の会
http://mitakanfs.blog.fc2.com/

NPO法人日本シニアジョブクラブ
http://jsjc.web.fc2.com/

三鷹市医療と福祉をすすめる会

三鷹科学遊びの会

2016年7月

みたか 三鷹市民の集いの場
みんなの広場

みたか・みんなの広場運営協議会
三鷹市下連雀4-5-19
http://minnannohiroba.web.fc2.com/
☎080-1362-5359 なりきよ

第24回市民リレートーク 浅沼 幸子さん 「紅茶の世界あれこれ」

私はブルックボンドという紅茶会社に勤務して、CR事業部に所属していました。そこで、青山、銀座、大阪の三つの教室を立ち上げ、独立し、紅茶にかかわって20年以上になります。

お茶は唐の時代よりも前に始まったと言われて、最初は薬として飲まれており、中国で薬から飲料に変化するの6世紀くらい。その後、茶葉交易が始まって、モンゴル、イスラム圏、トルコ、ロシア等に伝わりました。お茶はかきまばりますので、運搬し易いように圧縮して板状に硬くして運びます。これを団茶(だんちゃ)とか碾茶(てんちゃ)と言います。それをナイフで削って鍋に入れて動物の乳を入れて煮込んで飲んでいたのね。嗜好飲料もかねていましたが、ビタミンを補うという意味で定着していきます。

新大陸を発見する時代に海路を伝わって、西はスペイン、東はオランダが支配することになり、そこで東インド会社が出てくるのね。そして、ヨーロッパにお茶を運びます。船は揺れますから、重石がわりに中国の食器を使って、その中にお茶を入れて運びました。今考えますと、そうして運ばれたお茶は劣化していたんじゃないかと。でも、当時のお茶は銀よりも価値がある珍しいもの、宮廷の貢ぎ物という形で献上されました。

17世紀初頭に、日本のお茶もオランダの船でヨーロッパにたどり着いたというお話もあります。それは嬉野の釜炒り緑茶だったと言われていたの。それにお砂糖を入れて飲んだようなの。

日本には、明治時代に入ってからです。当時はやはりハイソサイエティの飲み物でしたが、いまのように普通の人々が飲むようになったのは戦後なのね。伝統的なイギリススタイルの飲み方は、お砂糖とミルクを入れますが、私が子供の頃はレモンティーで、これはアメリカからの物資の影響なのね。当時の「太陽」という雑誌に同潤会アパートの記事があって、茶こしに紅茶の葉を入れてゆすってお茶を飲んでいて記事を読みましたが、でも、そうやって美味しいのかしらね。日本茶を茶こしでいれていただくとうなんでしょうか。コヨリ状態になっているお茶は、お湯をくぐらせただけでは美味しさは出てこないのよ。ポットの中でゆっくりと自分を思う存分だしていただき、と言わないと美味しさはでてこないの。



私が紅茶の仕事をするようになったきっかけは、母がお茶が好きだったということもありますが、私は紅茶の香りが好きだったのね。夫もリベラルな雰囲気があったので結婚したのですが、ところが、子どもが大きくなって、嫁ぎ先でアクシデントが起こったりしたときに、あれ？結婚ってこれですか？という感じを持つようになったの。それが最初のきっかけなのね。そして、子どもも社会人になって、パートナーだけを切るのにはフェアじゃないと思ったんですよ。そこで、私は家族を解散しようという提案をいたしました。ここに行くまでに私は自立をしなければいけないわけで、私は20年くらい前から準備を始めました。

まず、自立のためには収入を何とかしなくてはならないということだったんですね。第二子が生まれてからは、自分がなにを食べていくかを考えましたね。その時、紅茶しかないと思ってその道に行くことにしました。

「自律」にも迷いましたね。自分の好きなことをやっていくためには、自分で自分の行為を規制していかなくちゃいけないわけですね。なにかあっても自分で判断して自分で責任をとらなくちゃいけないのね。

ここ3、4年心理学の勉強をしてわかったことがあります。マズローの欲求階層説があって、人間には五つの欲求があるというのね。生理的欲求、安全・安心、愛情と所属、承認と自尊、ここまですべて欠乏欲求という分野に入ります。最後のひとつが成長欲求で、自己達成と自分をコントロールできるか、という二つなんです。

私はこの自己達成が欲しかったのね。平たく言うと、自分を取り戻して自分らしく生きる、ということ。その手段として、紅茶で自立をして自分をコントロールしていきたいということが、私の死ぬまでの希望なんです。もちろん、社会と調和しながらね。

シリーズ「市民のお葬式」Part 1 宗教家と語るお葬式

2016年5月7日
於三鷹市民協働センター

「キリスト教での死と葬儀」 和泉福音教会牧師 青木 義紀さん

私はもともとキリスト教の家庭に生まれたわけではありません。母親が教会に通うようになって、その内に私も教会に行くようになって、そしてクリスチャンになりました。

1999年に牧師になりましたが、3年間働いた後、アメリカ、オランダ、ベルギーに留学する機会を得ました。2014年に復職して、三鷹の教会に派遣されました。現在は、杉並区のと泉福音教会に勤めています。

今日は、「キリスト教の死と葬儀」ということで、基本的なことをシンプルにお話しさせていただきますと思います。

キリスト教で、死とは何なのかということですが、聖書を見ますと、もともと人間は「死なない存在」として創られたと書かれています。神さまがエデンの園にいるアダムに「園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ」と言われました。しかしアダムとエバは、これを取って食べてしまいました。その結果、人は死ぬ存在になってしまいました。人類の代表であったアダムとエバが犯した罪によって、罪が世界に入ってきました。これが、聖書の語る死の始まりです。ここから、すべての人が死ぬこととなりました。

今日の会を紹介した朝日デジタルの記事に「人は100%死ぬ」と書いてあります。私たちは、当たり前のように違和感を覚えませんが、死については慣れることがあります。死を迎える時、私たちは常に恐怖と異質性を感じます。なぜか。それは、人がもともと死なない存在で、死は本来の人間にはなかったものだからです。死は当たり前ではない。これが聖書の基本的な理解です。死は、罪の結果なのです。

ただ、イエス・キリストが十字架にかけて、すべての人の罪の身代わりとなってくださった。人類の罪を一人で背負ってくれた結果、人間の死の意味に変化が起きました。イエス・キリストの罪の解決を自分のものとした人は、死が単なる罪のさばきではなくて、「救いの完成」の入り口になるのです。信仰者にとっては、死が希望になるのです。

では、信仰者にとって死が希望であるならば、信仰を持たない人にとってはどうなるのか。



信仰を持たない人は、死の責任を自分で負わなければならないのです。では、信仰があるかないかを判断するのは誰か。それは、私たち人間ではなくて、神さまです。誰が滅びるかということは、決して人間が判断できません。これは、神さまに委ねるしかないのです。

信仰者にとって死は希望です。では、クリスチャンは死を悲しまないのか。決してそんなことはありません。クリスチャンにも、家族や身近な人を亡くした悲しみはあります。しかしそれは、絶望の悲しみではなくて、ひと時の別れの悲しみです。亡くなった方には、やがてもう一度会えるという、希望を残したひと時の別れの悲しみなのです。信仰者も葬儀で悲しみます。泣きます。落ち込みます。でもそれは、この地上ではもう会えないという悲しみであって、そこには天でもう一度会えるという希望があります。そして今度は、天で永遠にともに生き続けることになるのです。

死には、ひと時の別れの悲しみはありますけれども、それ以上に、神さまに創られた人間が、もう一度、神のもとへと帰っていくという故郷への帰還にも似た安心があります。究極的に私たちは、死を通してその安心を味わうことになるのです。そして死は、私たちの人生の完成です。人それぞれ、人生の中に目標を持っていますが、それを達成したからといって人生は終わりません。人生の究極的な目的は死であり、死の向こうに生きるということです。死が最終目標ではなく、死を突き破って生きることで、最後までしぼんでいかない人生を私たちは歩むのです。

キリスト教では、亡くなられた方を「召天者」と呼びます。イエス・キリストには「昇天」という言葉を使いますが、信仰者には「召天」という字を使います。それは、神さまから天に呼ばれて、神のもとに帰るという意味です。

次に、キリスト教の葬儀の基本的な理念の話に移ります。

キリスト教の葬式には、「鎮魂」といった魂を供養する視点は一切ありません。だから、故人に語りかけたりはしません。亡くなると、人は神さまの完全な支配のもとに置かれるので、生きている側から死んだ人に何か働きかけて、その結果行き先が変わるということは一切ないのです。葬儀は、亡くなられた方の生涯や人生の足跡、あるいは故人の存在を偲ぶために行ないます。仏教の輪廻転生のような考え方は、キリスト教には一切ありません。

人生は、たった一度きりです。人は、一度生まれて、一度死ぬ。それだけです。だから、一度限りの人生に大きな価値があるのです。神さまに生を受けたかけがえのない人生です。他の人と、決して同じではない人生です。ですから、その人がどういう人生を送ったかということが、かけがえのない尊さを持つのです。キリスト教は、それを重んじます。そして、その人の尊さ、大切さを、みんなで味わうということが、葬儀の重要な中核になります。そのことを通して、故人にいのちを与えて、生涯を導いた神さまのすばらしさを、みんなで味わうのです。

以上のように、故人に大きな価値を置きますから、その方と一緒に暮らしてきた人たちは、大きな悲しみに陥ります。だから、遺族や関係者を慰めることを大切にします。

先の内田副住職のレジュメには、仏教ではしっかりとした儀式で死者を送ることが本義で、残された人の安心は副産物だとありましたが、キリスト教ではむしろ逆だと言えるかと思えます。

そして葬儀のもう一つ大事な点は、ひとりの人の葬儀を通して、自分もまた、やがては死ぬべき存在なのだという厳粛な事実を思い返して、今後、死を迎えるまでの人生を、どのように生きていくべきかを問い直すということです。

キリスト教では、死を希望という基調で見ますので、葬儀全体も希望を大事なものとして営んでいきます。聖書の中には、「悲しみに沈むことのないために」という言葉があります。死んだら終わりだという絶望感に陥るのではなくて、死を通して生きていく永遠の命があるのだということ。その希望をもって生き続ける存在だということ。それを大切にします。だから、キリスト教の葬儀には、どこか明るさがあります。悲しんでいる人はいますが、絶望はしないのです。

日本人で、はじめてキリスト教の葬儀に出るといふ方から、やってはいけないこととか口にしてはいけないことなどがありますか、という質問をしばしば受けます。

キリスト教には、死をめぐって「縁起」とか、「忌むべきもの」が基本的にありません。だから、そういうタブーに縛られるということがないのです。

では、実際にキリスト教の葬儀がどのように行なわれていくかを紹介します。まず、牧師はその人の末期段階から呼ばれます。病院や自宅に赴いて、その人の手をとって、慰めや希望を確認して祈り、死に向かう準備をします。以前にある僧侶の方と話をしていたら、「牧師さんは良いですね。僧侶がその段階で病院へ行ったら、縁起でもない」と追いつ返されます。」(笑)と仰っていました。

息を引き取ったら、まず、近親者だけで遺体を棺に移す小さな式を行ないます。それから、通夜に当たる前夜式を行ない、そして告別式となります。告別式の後は、火葬場へ行って、そこでも小さな式を行ないます。また、遺骨を墓に納める時も、墓の前で納骨式を行ないます。これは、葬儀当日の場合もありますが、数年後ということもあります。どの式も基本的な内容は、神への祈り、讃美歌、聖書の話の三つです。

「〇回忌」というものはありません。家庭によっては、記念会をして、亡くなった方を偲ぶ時を持ちます。それは、亡くなった方が消えてなくなったのではなくて、永遠に生きているということ。そして、やがて自分たちと一緒に永遠に生き続けると考えるからです。教会全体でも、春のイースター(キリストの復活祭)や、秋の召天者記念礼拝などで、亡くなられた方を偲ぶ特別な時を持ちます。

キリスト教では、葬儀は亡くなられた本人というよりも、むしろこの地上に残された方々のために行なうところがあります。亡くなられた本人はもうすでに神さまの完全な守りの中に置かれているからです。

ヨハネの黙示録には、こういう言葉があります。

「神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

天国には、苦しみとか、泣き叫びとか、そのほか私たちにとって苦痛となるものは一切ありません。だから、亡くなった人のために私たちが心配したり、悩んだり、落ち込む必要は一切ないと、聖書は語っているのです。

ありがとうございました。